

# ミャンマーの鉄道は 日本と異なるメーターゲージ ～帝国主義の時代とレールの幅の関係～

四国情報通信懇談会

副会長 原 量 宏

(香川大学 瀬戸内圏研究センター 特任教授)



一昨年、遠隔医療の講演で、ミャンマーのヤンゴンまで行ってきました。それまでミャンマーに関しては、「ビルマの豎琴」のお話ししか知りませんでした。実際に行ってみますと、日本と同じ仏教国のためか大変親日的で、お話しする際の雰囲気も日本人と間違えそうな方ばかりでした。ミャンマー語と日本語は、語順を含め文法はほぼ同じとのこと、日本語に堪能な方も大変多かったです。観光では、なんとといってもヤンゴン市中心部のシュエダゴン・パゴダですが、その規模、壮麗さには圧倒されました。ところで、私は大の鉄道ファンなので、せっかくの機会でしたので、ミャンマーの鉄道にも乗ってみました。皆様、日本の鉄道（在来線）のレールの幅は、世界の標準である1.435m（標準軌）に対し、幅の狭い1.067m（狭軌）であることはよくご存知と思います。それに対し、ミャンマーをはじめ、タイ、ベトナム等の鉄道は、さらに狭い1.0mちょうどで、メーターゲージと呼ばれています。一方、インドネシア、フィリピンなどの島国では、日本と同じ1.067mとなっており、なぜインドシナ半島の国々と島嶼部の国々の間で、6センチ7ミリの差が生じたかに大変興味が出てきます。

そこで、アジアからアフリカまで対象を広げてみると、大変興味深い事実が浮かび上がってきます。鉄道が普及し始めた1870年代は、いわゆる帝国主義の時代で、イギリスとフランスが、自国の支配する地域に鉄道を積極的に建設していました。現在のアフリカをみても、イギリスの旧植民地では1.067m、フランスの旧植民地は1.0mときっちりわかれています。アジアにおいては、フランスは大陸のインドシナ半島に、イギリスは自国が島国であるため、やはり日本を含む島国に関心があったと思われます。日本では、明治時代のお役人が、あまり理由もわからず、建設費の安価な狭軌を選んだとされていますが、やはり帝国主義の時代にイギリスの強い影響で1.067mになったと思われます。